慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第十九世紀前半の英国に於ける社会主義学説の対抗理論として発達を見たる限界効用学説の先蹤
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.3 (1939. 3) ,p.341(53)- 375(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19390301-0053
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19390301-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本多利明の經濟開發論は明かに德川時代の經濟思想史中、最も進取的な議論であり、殊に寛政時代にあつて特異な存在と云はなければならない。しかしその以前寶曆明和頃の社會情勢から見る時は、この種の歐化主義者を生むことは、それほど不思議なことではない。彼の議論が唯に西洋知識に基づくばかりでなく、著しく合理的な點において特徴がある。それにも拘らず依然として武士本位の立場にあることは、彼も亦時代の兒たる所以を示すことになるであらう。

（昭和十四年二月二十一日稿）

第十九世紀前半英國社會主義學說の對抗理論として發達を見たる限界效用學說の先蹤

高橋誠一郎

一

經濟價値の概念には自由交易の下に於ける事實上の價格形成によつて測定せらるゝ一物件の性質若しくは屬性と、社會政策に關するものとの二者が存する。アダム・スミス及び古典學派の經濟學說は價格經濟の科學的分析と自由主義の實現を企圖する政治的傳道との混合物である。

スミスは、使用に際して最大なる價値を有する諸物が屢々交換に際して殆んど何等の價値をも有することなく、而して之れに反し、交換に際して最大なる價値を有するものが、往々使用に際して殆んど何等の價値をも有せざることあるの事實に基いて價格の原因として使用價値、即ち效用を排除した。而して彼れは先づ一般經濟生活の複雜なる事情から抽象して、單純、原始、自然の狀態に自己を限定し、這般の狀態に在つて價値を發生せしむるものが

勞働であることを看出した。或る貨物を所有し、而して自ら之れを使用し若しくは消費せずして、之れを他の貨物と交換せんことを欲する者に對する其の貨物の價値は、そが彼れをして購入し若しくは支配するを得せしむる勞働の定量に等しきものである。勞働はあらゆる貨物の交換價値の眞尺度である。總べての物の眞價格、即ち總べての物が之れを取得せんことを欲する人に對して眞に費さしむる所のものは之れを取得するの勞苦及び煩勞である。（Wealth of Nations, 1st ed., 1776, vol. I, pp. 35-36.）。スミスは又、彼れが現實生活に於いて看出せるが儘に價値及び其の多少を決定する諸原因を叙述する。玆に彼れは原則として三個の要素が相合して生產物の交換價値を構成するものゝ觀る。生產の勞働の外に、所要の資本に對する利子及び所要の土地に對する地代も亦、存する。價格の總べての相異れる構成部分の眞價値は其の各々が購入し若しくは支配し得る勞働の定量によつて測定せられる。勞働は啻だに勞働に歸屬する價格の部分のみならず、地代及び利潤に歸屬する所のものゝ價値をも測定する。あらゆる社會に於いて、あらゆる貨物の價格は結局是れ等三部分の或る孰れかの一若しくは總べてに歸屬する、而してあらゆる進步せる社會に於いては、總べて此の三部分は、多少の相違はあるが、構成部分として大部分の貨物の價格中に入るのである。（ibid., p. 60.）。而してスミスは遂に是れ等「勞働費說」と「勞働支配說」との間の關係を認識することなくして、勞働費說に對して優越なる地位を與へたのである。

リカードオは前述せるが如きアダム・スミスの價値學說中に包含せらるゝ不完全なる點を明確ならしめ、勞働費用は市場價格を規制するものと做すの理論を發達せしめて、スミスの體系に一致と統一とを得せしめんとした。而して結局に於いて勞働費用の定量が貨物の交換價値を決定すると做すの說は彼れの直接後繼者によつて一層强調せらるゝことゝ爲つた。（James Mill, Elements of Political Economy, 3rd ed., 1826, p. 96.）。洵に、諸貨物の交換價値は其の中に費された勞働の定量によつて決定せらるゝと做すものは、リカードオ學派の根本原理たるものであつた。

二

實際生活上無數の例外に遭遇するに拘らず、あらゆる收入形態は之れを受くる者が自ら一定の努力を行へるの事實に依つて是認せらる可きものであると云ふ感情は可なりに深く吾人の倫理性中に根差せる所のものであり、而してあらゆる價値若しくは少くともあらゆる經濟的所得の基礎は須らく勞働若しくは犧牲でなければならぬと云ふ倫理的原則は、縱令ひ、必ずしも確乎たる根據を有するものではないにしろ、尙ほ決して擁護不可能なるものではない。然しながら、自由交易の下に於いては、價格は事實費されたる勞働若しくは犧牲によつて決定せられ若しくは之れに適應するの傾向があると云ふ實證科學的學說は、現代社會に於いて一般に行はるゝ生產の條件に照して斷じて正確なりとは認め得ざるものがある。而も勞働價値說は資本主義的經濟制度を敵視する者の間に地步を占め、彼れ等の主張に對して科學的基礎を與ふるものと爲つた。彼れ等は勞働費價値學說を哲學的是認を以つて反復すると共に、之れに結合するに、價値を創造する勞働者が其の創造せる價値を騙取せらるゝと做すの理論を以つてした。

ロバート・オーエンは曰く、價値の自然的標準は原則上人間の勞働、即ち肉體及び精神の結合せる力の發動せしめ

られたものであり、而して這般の原則を直ちに實行せしむるは著しく有利であり、又、今や絶對の必要と爲つたのであると。(Robert Owen, Report to the County of Lanark, of a Plan for Relieving Public Distress, and Removing Discontent, by giving permanent, productive employment, to the poor and working classes; under arrangements which will essentially improve their character, and ameliorate their condition; diminish the expenses of production and consumption, and create markets co-extensive with production, 1821, p. 6.)。

同じく一千八百二十一年に出版せられた匿名氏の書 The Source and Remedy of the National Difficulties, deduced from Principles of Political Economy, in a Letter to Lord John Russell. はあらゆる財貨の價値を以つて勞働に基くものと觀た。一國の富は其の保存せられたる勞働、若しくは寧ろ其の保存せられたる餘剩勞働、即ち之れが平常且つ必要なる消費を超過せる勞働より成る。即ち餘剩勞働は專ら自己及び家族の維持及び享樂に充當せらるゝ所のものを超過せる個人の勞働の總べてを意味する。斯くの如き勞働が即ち資本である。「保留せられたる餘剩勞働が資本である」。(ibid., p. 3.)。這般の餘剩勞働は之れを生ぜしめたる者によつて所有せられずして、勞働者が之れを生ぜしめつゝある間に彼れに必要品を許與せる者によつて所有せらるゝが故に、資本は其の生産者より奪はれたる餘剩勞働である。(ibid., p. 6.)。

レーヴンストーン(Piercy Ravenstone)も亦、等しく勞働價値說に立脚して、地代若しくは利潤に衣食する懶惰者を以つて勞作者の餘剩收益に生活するものと做した。(Ravenstone, A Few Doubts as to the Correctness of some Opinions generally entertained on the Subjects of Population and Political Economy, 1821, p. 311.)。資本は勞働の創造物であり、保存せられたる勞働集積の結果である。(Ravenstone, Thoughts on the Funding System and its Effects, 1824, p. 39; A Few Doubts, op. cit., p. 294.)。資本は單に交換の用具に過ぎざるものであつて、新たなる勞働に對して保存せられたる勞働を交換する。價値の唯一の泉源は生産的勞働、特に必要品に使用せられた勞働である。(ibid., p. 352.)。

ホッヂスキン(Thomas Hodgskin)も同じく、貨物の相對的價値を決定する準則を以つて、是れ等のものを生産するに要する勞働量の外に存することなく、又、存し得ること能はずと主張する。一枚の上衣、一足の靴若しくは一塊の麵麭の眞價格、換言すれば、人間が是れ等必要なる物品の孰れのものをも享有し得可きが爲めに自然が彼れより要求する總べてのものは勞働の一定量である。然しながら、勞働者は是れ等物品の孰れをも享有せんが爲めには、自然が彼れより要求する勞働の定量以上に更らに大なる定量を資本家に與へなければならぬ。彼れは羊の所有者、羊毛の購買者、紡績工場の所有者、織物工場の所有者、呉服商、仕立屋の主人に對して利子を支拂はなければならぬ。勞働者が一枚の上衣、若しくは一塊の麵麭を享有するが爲めに、其の上衣若しくは其の麵麭の費用以上に幾許の勞働を與へざる可からざるかは之れを言ふことを得ないが、恐らくは其の六倍に達してゐよう。(Popular Political Economy, 1827, pp. 22.)。ホッヂスキンを以つて觀れば、害惡の根源は實に茲に存する。

エドモンズ(Thomas Rowe Edmonds)も亦、國民に富を供給するは生産的勞働であり、あらゆる貨物の價値を測

定するは勞働の定量であるが、勞働其の者は生活の必要品によつて測定せらるゝものと觀た。勞働者は縱令ひ彼れが幾許を生產するも其の中から恰も自己の生活を維持するに必要なる高だけを得るに過ぎない。一國の技術が進步して一人の勞働者が二人分の必要品を生產することが出來るとしたならば、彼れは賃銀として其の二分の一を取得し、三人分を生產するとしたならば、三分の一を取得し、十人分を生產し得るとしたならば、單に十分の一のみを收受す可きである。(Edmonds, Practical, Moral, and Political Economy, on the Government, Religion, and Institutions most conduive to Individual Happiness and National Power, 1828, pp. 100-101, 122, 288.)。

ブレー (John Francis Bray) も同樣に、價値を賦與するは惟り勞働あるのみであり、而して、等しき勞働を行ふ總べての者は亦、等しき報酬を受く可きものと思惟した。(Bray, Labour's Wrongs and Labour's Remedy; or, The Age of Might and the Age of Right, 1839, p. 30.)。然るに、勞作者は僅々半日の價値に對して全日の勞働を資本家に與へる。而して此の價値すら前以つて勞働より掠取せる所のものである。蓋し資本家は生產者に非ざるが故に交換す可き何物をも有すること能はざるが故である。富者をして彌やが上にも富裕ならしめ、貧者をして彌やが上にも貧困ならしむるものは、論者の想像するが如く、個人に於ける身心の諸力の不平等ではなくして、吾人の周圍に存する富と力の不平等である。(ibid., pp. 48-49.)。ブレーに從へば、斯くの如き害惡の性質より推して、之れを救濟す可き道は惟り、平等なる交換、詳言すれば、平等なる勞働量の交換の設定に看出され得るのである。(ibid., p. 110.)。

三

勞作階級の勃興と結合せる諸問題の急迫並びに社會主義者及び其の他の者の著述中に於ける其の理論的表現は古典的學說の上に深甚なる修正を來さしむるに足るの力を有して居つた。軈がて古典的理論は其の自由主義的經濟理論の政治的意義に對する攻擊の機會を與へた部分を洗ひ去られたのである。多數の經濟學者は彼れ等をして餘剩の觀念を除去するを得せしむ可き別箇の說明の原理に便ならしむ可く漸次勞働價値說を拋棄した。斯くして效用價値理論並びに之れに附隨せる系論として資本の生產力說は徐々に其の發達を見たのである。而して是れに由つて一團の經濟學者等は社會的調和の根本的哲理を救援し、能ふ限り自由放任の理論を保持し、而して又、リカードオ經濟學說が導入するを得る搾取理論を回避せんことを企圖した。(Erich Roll, A History of Economic Thought, 1938, pp. 316-317.)。斯くの如き發達の出發點と爲つたものは前述せるが如き價値理論の公式化に際してアダム・スミスの示したる動搖不定と是れ等の動搖不定によつて生ぜしめられた矛盾撞着より解放せられんとするリカードオの企圖とであつた。

リカードオの解決は勞働價値說に對して例外を認むるに存する。リカードオは其の『經濟原論』の初版に於いても、既に貨物の生產に投入せらるゝ勞働量が其の相對的價値を支配すると做すの原理が機械及び其の他の固定的持續的資本の使用によつて著しく變更せしめらるゝものと觀て居つたのであるが、(Ricardo, On the Principles of Political Economy, and Taxation, 1817, pp. 22-23.)、同書の第三版に至つて、更らに、相異れる資本の高が長短

相同じからざる期間使用せらるゝに基ける相對的價値を決定する原理の變更を一層强調した。（昭和十二年版拙著『經濟學史』上卷三五二頁以下參照）。リカードオの直接繼承者等は當然彼れ等に遺されたる勞働價値說の弱點によつて惑亂せられなければならなかつた。ジェームズ・ミルは資本を以つて蓄藏せられたる勞働に外ならざるものと主張するによつて勞働價値說を補强せんとした。是に於いて乎、利潤は單に勞働に對する報酬たるに過ぎざるの觀あるものと爲る。（前揭拙著四一九頁以下參照）。斯くの如くして彼れは利潤の起源及び勞働價値說に對する例外に關する問題を解決したと思惟したのであるが、而も彼れは固より這般の問題に對して何等眞個の解答を與へたものではなかつた。マカラックは二貨物の交換に於いて發生する「交換價値」若しくは「相對的價値」と一貨物の領有若しくは生產に費されたる勞働量若しくは考査の行はるゝ時期に於いて斯くの如き目的の爲めに要求せらる可き勞働量に對する關係に於ける「眞實價値」とを區別する。（McCulloch, The Principles of Political Economy: with a sketch of the rise and progress of the science, 1825, p. 211.）。而して何等の獨占も存せざる時、又、市場に於ける貨物の供給が正確に有效なる需要と相應せしめらるゝ時には、是れ等のものゝ交換價値は其の眞實價値と同一である。（ibid., p. 215.）。正常には、あらゆる交換は等一の眞實價値の交換なる可きである。斯くの如きは資本家及び勞働者間の交換に對しても眞なるを失はない。然るに、マカラックは餘剩の起源を說明するが爲めに、單純にリカードオの「勞働費說」よりマルサスの「勞働支配說」へ逃避した。一貨物の支配し得る勞働の高は原則として其の眞實價値よりも大である。而して其の差異が利潤を構成する。如何なる資本家と雖も、既に遂行せられたる一定量の勞働の所產を遂行せらる可き勞働の同一量の所產と交換す可き意志を有すること能はざる可きである。（ibid., pp. 221-222.）。資本の利潤は單に「蓄積せられたる勞働の賃銀」に對する別名に過ぎざるものである。是れ等のものは其の生產に資本の或る一定部分が費消せられたるあらゆる貨物の價格の一部を構成する。然しながら、這般の資本が勞働者其の人に屬するか、若しくは他の者によつて彼れに供給せらるゝかは、明かに何等の影響をも有せざるものである。其の資本が勞働者に屬せざる時は、彼れによつて生產せられたる貨物は二個の特殊部分に分割せられる、其の一は直接勞働の所產であり、他のものは是れ等のものゝ上に投費せられた資本、即ち蓄積せられた勞働の所產である。（ibid., p. 291.）。斯くて彼れは利潤を以つて資本家によつて提供せらるゝ勞働に對する賃銀と看做して、勞働價値說より生ずる不可避の結果たるの觀ある「搾取說」即ち利潤を以つて賃銀契約によつて勞働者から彼れが專ら生產せる富を搾取せるものと做すの解釋に赴くことを免れんとした。

四

リカードオ以後の經濟學者等は資本主義的生產の下に於ける市場現象と勞働價値學說との間の關係を解明するが爲めに、勞働價値說の系論として餘剩價値說を採用する社會主義者流の方法を選んで斯學說を救濟する唯一の途に着くことを嫌忌し、遂に之れを排除するに至るのである。而して、斯くの如き過程の端緒がマルサスに發するものであることは吾人が前揭拙著中に於いて述べたるが如くである。（同書四七〇頁以下參照）。而してあらゆる客觀的價値學說の反對者として、リカードオ流の理論を攻擊せる者にサミュール・ベーリィがあり、（同書五〇〇頁以下參

照）、又、需要のみ惟り價格を規制す可きものであることを主張せる者にサー・エドワード・ウェストの在つたことも亦、吾人が前掲書中に於いて論述せるが如くである。（同書五〇二頁以下參照）。而も、前者は勞働價値說を不信ならしむるに與つて力があつたのであるが、彼れ自らは之れに代ふるに他の價値理論を以つてすることなくして終り、後者は猶ほ限界效用の觀念を構成するには甚だ大なる隔りを有するのみならず、後に至つては費用說を支持して居つた。

然しながら、斯くの如き間に於いて、漸次心理的要素は導入せられて、效用及び需要は新たに强調せられんとした。ジェレミー・ベンサムは夙に其の Principles of Morals and Legislation, 1780. 及び A Table of the Springs of Human Action: shewing the Several Species of Pleasures and Pains of which Man's Nature is susceptible. に於いて、欲望及び願望に關して分析を行ひ、「或る人の所有せる財産の實體の定量が愈々大なれば、一定の高に對する其の財産の實體の他の定量の附加によつて彼れの受くる幸福の定量は愈々小である」と稱して限定效用の觀念を暗示してゐる。（The Works of Jeremy Bentham, ed. by John Bowring, vol. ix, p. 18.）。然るに、彼れの Manual of Political Economy. は毫も之れに關說する所がなかつた。ベンサム哲學の影響を受くること著大であつたリカードオ學派は、彼れ等が經濟學に與へたる劃然たる境界によつて欲望に關する論述を排斥した。而して、彼れ等は效用を以つて交換價値に取つて絕對に缺く可らざるものではあるが、其の尺度ではないと觀て過ぎた。

然るに反スミス經濟學者ローダデールは、最も有用なる物品の定量を增加するによつて、吾人は屢々其の總交換價値を減少すると云ふ明白なる事實に注意した。而して彼れはスミスと等しく使用價値と交換價値とが相互に對立するものと思惟した。彼れは其のスミス價値理論の解釋中に效用の要素を注入した。彼れに從へば、富は效用を有するあらゆる物である。而も個人的富は效用及び稀少性を有する。是れ等の兩要素は價値を決定する。是れ等のものは需要及び供給に於いて表現せらるゝ。而して其の孰れかの變更は價値に影響する。彼れは幾分現代の經濟學者が需要の彈力性を解析するに等しき方法に於いて價値に及ぼす需要及び供給增減の結果を檢討する。（『三田學會雜誌』第三十一卷第四號所載拙稿『第十九世紀英國反正統派經濟學』七―一一頁參照）。

次いで Elements of Political Science, 1814. 三卷の著者ジョン・クレーグは其の一千八百二十一年の著 Remarks on some Fundamental Doctrines in Political Economy illustrated by a Brief Inquiry into the Economical State of Britain since the year 1815. に於いて、交換價値若しくは個人的富は使用價値若しくは國民的富から注意深く區別せらる可きものであると云ふローダデールの意見を考察し、而して效用が總べての價値の基礎であることを看出す。諸貨物の相對的價値が變化することあるものであり、而して、或る物品の主たる諸效用が依然として損傷せらるゝことがないのに、是れ等のものが以前よりも大なる數量に於いて生産せらるゝが爲めに、偶々之れを所有せる人々がより貧困と爲ることあるは否み難い事實である。（ibid., p. 10.）。然しながら、使用價値が此の點に於いて交換價値に對立すると論斷するは誤りである。蓋し、斯くの如き場合には消滅する其の效用の他のものが存するが故である。其の所有は最早卓越の表象でもなければ、又、生産せられた附加的定量は其の消費せられなければならぬ

人々に對して其の曩時の價格に等しき滿足を生じ得ることもない。若し上衣が其の價格に於いて一半を減ずるならば、二枚の上衣の交換價値は今や曩きに一枚の價値であつた所のものに等しい、而も是れ等のものゝ使用價値は何等知覺し得る增加をも見ることなかる可きであらう。(ibid., p. 11.)。購買者の評價に於いては舊時の價格を値した廣幅黑羅紗の總べてが曩きに市場に齎され、而して今や更らに多くが處分せらる可きであるならば、そは其の舊時の値段に等しき其の效用を算定することのなかつた人々に對して賣り捌かれなければならぬ。洵に新たなる購買者は價格の引き下げに準じて現る可きである。蓋し、其の低下の各階段に於いて、そは附加的人數が其の滿足を生ずるの力に就いて形成せる見積、即ち換言すれば、其の使用價値に關する彼れ等の評價まで引き下げらるゝが故である。(ibid., p. 3.)。即ちクレーグは、使用價値が交換價値によつて極めて正確に測定せられざるを得ずと做すの意見を有し、而して一財貨の效用を供給が增加せらるゝに連れて作用する種々なる層に分析したのである。

クレーグは進んで、或る貨物の交換價値が附加的供給によつて減少するならば、他の諸貨物の價値は增加す可きことを指摘する。蓋し、曩きに餘分に生產せらるゝ物品を購入せる人々はより低廉なる價格を以つて彼れ等が其の不足する所のものを取得するを以つて彼れ等の收入の部分を或る他の方法に投費す可きが故である。而して是れに由つて或る他の物品に對して生じつゝある新需要は是れ等のものゝ交換價値を他のものゝ其れが引き下げらるゝに準じて引き上ぐるであらう。(ibid., p. 12.)。是に於いて乎、貨物の增加せる供給は一般的價値に於ける減少を意味すると做すは誤りである。彼れは又、生產的勞働及び不生產的勞働の間に設けられたアダム・スミスの區別の無用を指摘し、リカードオ經濟學の根本敎義の一たる生活標準賃銀說を信ずることなく、(ibid., p. 64.)、又賃銀及び利潤の逆行說に反對し、(ibid., p. 90.)。地代說を論評して土地よりの收入と資本よりの收入との間の類似を注意した。(ibid., p. 138.)。(本項は專ら Edwin R. A. Seligman, On Some Neglected British Economists—The Economic Journal, vol. xiii, 1903. に據る。此の經濟學說史上に於ける最も注意す可き一論文は、其の後、一千九百二十五年Essays in Economics. 中に收錄せられた。ibid., pp. 64-121.)。

セリグマン敎授はクレーグを以つて效用と價値との間の連結を力說せる最初の英國の著者であつて、將さに限界效用の觀念を表明せんとせるものであると做してゐる。尙ほ同敎授に從へば、彼れは又、課稅の平等犧牲說を構成し、是れよりして分級及び差別の原理を引ける最初の英國人であり、而して又、課稅の資本化說を强調せる第十九世紀經濟學者中の最初の人であつた。(Seligman, Progressive Taxation in Theory and Practice, 2nd ed., 1908, pp. 257-259; The Shifting and Incidence of Taxation, 5th ed., 1926, pp. 175-180.)。

次いで、價値は一般原理として需要と限界生產費とによつて決定せらるゝ旨を述べた者に、ジ・ン・ルーク(John Rooke)がある。即ち彼れ曰く、「全供給に對して附加せられたる最後の附加的部分は其の生產に使用せられた勞働の費用及び資本の報酬を償還する以上のものを爲すことがないであらうと云ふのが、あらゆる販賣せらる可き物品の生產に於ける一般準則である。或る一定貨物が是れ以上を許すならば、供給は當然增加す可く、若し又、市場價値が平均、是れ等費用の二構成部分を與ふることがないならば、供給は減少するであらう。經濟學の關係及び割合

を規制するものはあらゆる方向に於いて其れ自體を弘布し擴張しつゝある此の普遍的にして且つ能動的なる原理である。必要は價値の自然的限界を劃する、而して消費と生產とは普遍的に需要に關して此の生產の最後の附加的部分によつて絕えず規制せらるゝのである。市場の實際的需要は供給を決定する、而して供給はそが市場に齎され得る最低の費用によつて規制せられる」と。（Rooke, An Inquiry into the Principles of National Wealth, Illustrated by the Political Economy of the British Empire, 1824, p. 26.）。ルークは又、一千八百十四、五年の頃 The Farmers' Journal. 誌上に五十餘篇の論文を公にしてゐるが、十四年七月に發表せられた其の第一論文に於いては穀物の價格騰貴の原因を論じ、而して十四年十一月に起草せられ、十五年二月に公にせられた第四論文に於いては「最劣地上に於ける穀物生產の費用は自然價格の調整者であり」、又、「土地の地代は生產に資する諸經費及び資本の普通の利潤が控除せられた後に殘存する純粹なる餘剩收益である」と云ふ學說を主張せる點に於いて地代學說の發達に貢獻せるものと看做され、其の公表の時期に於いてはトーレンズ、ウェスト及びマルサスに先んずるものと言はれてゐる。（Seligman, On Some Neglected British Economists, op. cit., p. 512.）。

五

シィニィオアの後を承けて牛津大學の經濟學教授に任命せられ、一千八百三十一年ダブリンの英國國立教會の大監督と爲る迄其の職に在つたリチャード・ホウェートリ（Richard Whately）の Introductory Lectures on Political Economy, delivered in Easter Term, MDCCCXXXI, 1831. は主として經濟學の範圍及び本質に關するものであつて、價値及び分配の中心の問題には觸れてゐないが、而も、經濟學を以つて富の研究であると定義することを拒み、之れに代へて Catallactics 即ち交換の科學（the Science of Exchanges）なる名稱を提唱せる點に於いて特に注意せらるゝものである。曰く、「アダム・スミスは洵に彼れの著を『國富論』と名附けた、而も斯くの如きは惟り主題に對して名稱を與ふるに過ぎざるものであつて、科學其の者に對して名稱を供給するものではない」と。（ibid., 2nd ed., 1832, p. 6.）。人間は交換を行ふ動物なりと定義せらるゝを得可きであらう。他の如何なる動物と雖も、他の諸點に於いては理性に近づくこと最も大なるものすら、如何見ても、物々交換若しくは何等かの方法に於いて或る物件を他の物件と交換せんとする最少の總念をも有することなきものである。而して、人間が經濟學によつて注視せらるゝのは惟り斯くの如き觀點に於いてゞある。這般の見解はアダム・スミスの其れと本質的に相異することのないものである。蓋し、斯學に於いては富なる名辭は交換せらるゝ貨物に限定せられ、而してそは是れ等のものが交換の目的物であり、若しくは目的物たる可く企圖せらるゝ限りに於いてのみ是れ等のものを取り扱ふが故である。然しながら、這般の理由は又、翻がて國民的富の科學としてよりも寧ろ交換の科學として經濟學を叙するを以つて惑らくはより便宜たらしむ可きであらう。即ち、斯學の取扱ふ物件其の者は、吾人が是れ等のものを交換の目的物たらしむるの可能性若しくは意志を除去するとしたならば、是れに由つて、是れ等のものをして富の追求せらるゝ究竟目的たる幸福に對して最高度に於いて資せしむることを得るとしても、直ちに其の領域より排除せらるゝが爲めである。例へば、アレグザンダー・セルカーク（Alex. Selkirke 蘇蘭土の水夫）の如き空漠たる島上に於ける

人、即ち其の冒險がデフォのロビンソン・クルーソー物語を暗示せりと想像せらるゝ人物は、食料、衣服及び諸般の娯樂品を支給せらるゝことが豐富であるとしたならば、彼れは單に形容的に富裕と稱せられ得可きものであつて、新たなる移民が到着すると共に直ちに交換し得可きものと爲り彼れをして嚴密なる意義に於いて富裕ならしむ可き幾多の貨物を有し得可きものであるが、而も、彼れは經濟學の受け容るゝことのない地位にあるものである。同樣に音樂的才能も、其の行使を以つて交換の目的物たらしむる職業的演奏者に取つては富であるが、斯くの如く之れを使用するは其の墮落たる上流階級に屬する人に取つては富ではない。從つて、そは、此の最後の場合に於いては、享樂の泉源であるが、經濟學の領域外に在るのである。斯くの如く富なる名辭を、交換し得るものと思料せらるゝ物件に限定するは、同一物をして、或る人に對しては富たらしむるも他に對しては然らしめざるを理由として反對せられた。這箇同一の事情は又、常にホウェートリに取つては、斯くの如き名辭の使用を推奬する主たる理由として映じたのである。即ち、同一物は別箇の人に對しては、別箇のものなるが故である。縱令ひ、吾人が所有物のあらゆる種類に關して、「富」及び「價値」なる名辭を使用するとしても、吾人は猶ほ、例へば、賣るが爲めに庭木を培養する養樹園主の庭木の蒐集に對する所有と、自己の地面を飾るが爲めに之れを植え附けた紳士の所有との間には、少くとも或る頗る大なる差別の存することを承認しなければならぬ。然しながら、一般社會に於ける「富」なる名辭の使用は甚しく精確ならざるの常であり、且つ其の最初に於いて、先づ事情の如何に據つて全然同一なる物を或ひは富の目的物として、或ひは然らざるものとして思料するに由つて混亂せしめらるゝを避くるが爲めに或る程度の注意を要す可きが故に、ホウェートリは這般の理由に據つて、善く交換のみに關するものとして經濟學を叙するを以つて、大體に於いて、より便宜なりと思惟する。(ibid., pp. 7-9.)。

ホウェートリに取つては效用及び富は相對的且つ主觀的であつた。而して現代の主觀主義者は、彼れ等が選擇を以つて經濟問題の精髓と看做すの事實を强調するが爲めに屢々ホウェートリのカタラクチックスなる名稱を採用したのである。(Roll, op. cit., p. 337.)。

ホウェートリは勞働說を排斥する。神の命令によつて、偶々價値ある物品が殆んど總べての場合に於いて、勞働によつて取得せらるゝことは事實であるが、而も猶ほ斯くの如きは偶然の出來事であつて、本然の其れではない。時折落下する隕石が金剛石及び眞珠であつたならば、又、是れ等の物品が現在掘鑿及び潛水によつて取得せらるゝと同一の定量まで、思ひ掛けなく拾ひ上げられたと何等異なることのない方法に於いて取得せらるゝを得たならば、是れ等のものは現在に於けると精確に同一價値なる可きである。經濟學に於ける他の多くの點に於けると等しく、此の點に於いても亦、人々は原因及び結果を混同するの傾きがある。人々が眞珠を得るが爲めに水に潛つたが爲めに是れ等のものは高い價格に賣れるのではなくして、却つて、是れ等のものが高價に賣れるが爲めに、人々は之れを求めて水を潛るのである。(ibid., pp. 252-253.)。アレグザンダー・グレー教授曰く、ホウェートリは彼れが斯くの如く思惟せるの時、墺太利學說の心髓の一面を其の精練なくして表明しつゝあつたのであると。(Alexander Gray, The Development of Economic Doctrine. An Introductory Survey, 1931, p. 331.)。然も、彼れは遂に何等主觀

價値理論を發達せしむることなくして終つたのである。

六

一千八百三十二年ホウェートリの後を繼いで牛津大學に於ける經濟學のドラムォンド講座を擔當せるウイリアム・フォアスター・ロイド（William Foster Lloyd）は其の A Lecture on the Notion of Value, as Distingruishable Not only from Utility, but Also from Value in Exchange. Delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term, 1833, 1834. に於いて、效用と交換價値との間の關係を說明するが爲めに初めて限界的分析の適用を行つた。彼れは後の限界理論の用語を使用することはなかつたのであるが、而も彼れは明確に全部效用と限界效用との間に區別を立て、而して價値は一貨物の最後の增加量に對する欲望の壓力に比例することを明かにした。

ロイドは先づ當時の經濟學者によつて論述せられたる一般的生產過多の問題に注意を向ける。諸貨物の一般的過多、若しくは換言すれば、普遍的生產過剩の可能性に關する問題が是れ迄時々論議せられて來た。或る一種の貨物の過多は其の發生が惟り可能であるばかりでなく、屢々であることが一般に承認せられた。二、三、四若しくは其れ以上の種類に就いても亦、同樣であるが、而も其の蓋然性及び頻繁性の程度は遞減する。是に於いて乎、拒否せらるゝ總べては其の同時に貨物の大多數に延長するの蓋然性及び其の普遍的なるの可能性である。ロイドが茲に此の問題を擧示したのは、差し當り其の十分なる考察を開始するの目的を以つてするに非ずして、單に、否定的方面を支持する者によつて唱導せられた主張の或るものに注意を喚起することが、彼れの目的に取つて有利なる可しと考へたが故である。彼れ等の言ふ所を以つてすれば、一般的貨物の過多は富の一般的過剩と同一事であり、總べての人間欲望の完全なる滿足と同一事なる可きである。然しながら、事實上、人類の願望には何等の定限なきものである。蓋し、一の不便が除去せらるゝ場合には、襲きには斷じて思ひも附かなかつた他の不便が現れて來るからである。斯くて又、財富獲得欲は現存欲望の滿足と共に擴張し行くものであつて、そは縱令ひ、絕對に無窮（infinite）とは稱し得ないにしろ、少くとも無定限（indefinite）と名附けられ得可きものである。（ibid., p. 7.）。而も、財富に對する熱望をして無定限ならしめ、飽足せしめざるものは、欲望の種類及び之れが滿足に必要なる財貨の種類が無窮に多樣なるが爲めであつて、或る特殊の對象に對しては供給の增加は飽足を齎し、價値は消滅す可きである。分量の增加は結局或る一定の願望の對象に對する需要を皆無ならしむるか、若しくは極度迄滿足せしむ可きである。然らば、需要若しくは欲望が斯くして完全に滿足せらるるに際しては、價値に關して果して何事が生ずるであらうか。あらゆる貨物の場合に於いて、其の價値は滿足の瞬間に於いて消滅することが看出さる可きである。例へば、水の場合に於いて、現在の必要を滿足せしめたる後に於いて何ものかゞ殘つたならば、吾人は之れが使用を節約し、之れを蓄藏し、若しくは之れを以つて財產たらしめ、又は他人が之れを使用するを阻止す可き何等の理由をも有することがない。（ibid., p. 10.）。

ロイドは現今一般に使用せらるゝ飢えたる人に對し、其の處分し得る食物が一オンスづゝ相次いで增加する場合を取つて其の說明を進め、オンスの數を屢次增加する時には、吾人は終に這般の確實なる特效藥たる食事によつて

食欲が全然若しくは殆んど失はるゝの時點に到達し、單一なるオンスに就いては之れを放棄するも保留するも無關心事たるに至る旨を論じ、而して明確に「抽象的效用」(abstract utility)を「特殊的效用」(special utility)から區別した。彼れは次第に減少し行く欲望を以つて、什分に壓縮せられた、即ち卷かれた際に、伸張せんとする最大なる傾向を有する懷中時計の發條が愈々益々實際に伸張するに從つて、其の飛び出さんとするの傾向を次第に減じ、遂には全然之れを失ふに比したのである。(ibid., pp. 11-12.)。而して彼れは相異れる欲望を以つて其の種々なる相違に從つて力の程度相異れる發條によつて表示せらる可きものと觀た。例へば食料及び水が滿足せしめ得る欲望は甚大なる力の發條によつて表示せらる可きである。衣料及び燃料は更らに力の劣れる發條によつて表示せられる。(ibid., p. 13.)。

彼れに據れば、同一の發條が比較せられ得可き二個の方法が存する。吾人は、一の懷中時計の大發條は渦卷發條よりも强大であると云ふ際に於けるが如く、絶對に是れ等のものを比較するを得可く、又、一の懷中時計が將さに運動を止めんとする際には、大發條は殆んど渦卷發條が其の最も壓縮せらるゝ際に有するよりも以上に其の伸張する實際の傾向に於いて强さを有することがないと稱し得るが如く、吾人は是れ等のものゝ實際的狀態の一定の變更の下に於ける其の伸張力を比較することが出來る。而して、效用は同名辭の普通の意味に於いては第一の方法に於いて測定せられる。吾人は絶對的に考察せられた諸對象物件の滿足せしめ得る欲望の重要性によつて是れ等のものゝ效用を估料する。水は其の豐富に存する陸上に於けるよりも其の稀少なる海上に於ける船中に在つて毫も有用の程度大なるものではない。穀物の效用は豐作後に於いても、飢饉の際と同一である。然しながら、吾人が價値に就いて云ふ際に諸欲望を估料するは斯くの如き意味に於いてゞはない。價値の依存する諸欲望は既に幾分か伸張せる發條の更らに伸張せんとするの傾向に類似する。是れ等のものは貨物の數量に於けるあらゆる變化と共に、又、之れに次げる絶對的欲望の滿足せらるゝ程度の變化に連れて變化する。(ibid., p.15.)。斯くの如き意味に於いては最も有用なる物品に就いての欲望は最も有用性少なき物品に就いての其れよりも少ないことがあるであらう。水は既に其の渴を醫して、單に其の身を洗はんことを願望する人によるよりも、渴に惱んで殆んど死せんとする他の者によつて欲望せらるゝことが大である。價値の依存するは斯くの如く估料せられたる欲望である。そは其の欲望と同一物ではないが、而も之れに比例し、又、之れより生ずる。彼れ曰く「其の究竟的意義に於いては、價値は疑ひもなく常に滿されたる欲望と滿されざる欲望との間の隔離の限界に於いて現るゝ心胸の感情を表示するものである」と。(ibid., p. 16.)。

ロイドを以つて觀れば、價値の概念は交換から獨立し、而して之れに先んずるものである。「諸物件は英國及び其の他吾人の熟知する總べての國々に於いて存するが如き社會の場合に於けると等しく、ロビンソン・クルーソーの如き孤立せる人の場合に於いても等しく所有者に眞實の重要性あるものたり得可きである」。(ibid., p. 20.)。彼れは又、特殊個人に對する價値と全集團に對する價値の間に相違の存し得可きことを注意し、之れを絶對價値(absolute value)と比較又は交換價値(comparative or exchangeable value)との間に存する區別と稱し、更らに又、斯くの如

き交換より獨立せる價値の意味に於いては、同一の諸物は富者に對するよりも貧民に對して價値大なることを敎へた。(ibid., p. 28.)。彼れは內在的價値と云ふが如きものゝ存在し得ることを否定した。價値なる名辭は貨物に固有なる性質を表示するものではない。そは心胸の一つの感情を表示するものであつて、這般の感情に影響し得る外部的事情の變化と共に變化し勝ちである、而も其の變化は之れが對象たる貨物の內在的性質に變化あると否とに依ることがないのである。(ibid., p. 31.)。單に價値が內在的であり得ないばかりでなく、一物件の效用も亦、何等價値以上に內在的あるものではない。價値と等しく效用は人類の欲望に關する對象を豫示する。氷は夏に於いては有用であるが、冬には無用である。而も、氷の內在的性質は總べての時に於いて、又、總べての場所に於いて同一である。ロイドは數學的記號を使用することがなかつたが、其の經濟學的分析は彼れが數學的修養の深かりしを示すものがある。

彼れの爾餘十一の講義は人口問題及び救貧法を取り扱へるものである。生活の手段に對する人口の壓迫に關してマルサスの主たる立場を承認しながらも、猶ほ、彼れは寬仁なる救貧法の體系を擁護す可き十分なる理由を看出すことなく、一千八百三十四年の救貧法改正法の精神並びに同法によつて代表せらるゝ思潮に全然反對した。(Two Lectures on the Checks to Population, delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term 1832, 1833; Four Lectures on Poor Laws, delivered before the University of Oxford in Michaelmas Term 1834, 1835; Two Lectures on Poor Laws, delivered before the University of Oxford in Hilary Term 1836, 1837; Two Lectures on the Justice of Poor Laws, and one Lecture on Rent, delivered in the University of Oxford in Michaelmas Term 1836, 1837; Lectures on Population, Value, Poor Laws, and Rent, delivered in the University of Oxford during the years 1832, 1833, 1834, 1835, and 1836, 1837.)。(Economic History (A Supplement to the Economic Journal, ed. by J. M. Keynes and D. H. Macgregor, vol. I (1926-1929), 1929, pp. 168-183; Seligman, op. cit., pp. 356-363.)。

尙ほ彼れが牛津大學に於ける經濟學講座を擔任する以前に於いて出版せるものに Prices of Corn in Oxford in the beginning of the fourteenth century: also from the year 1583 to the present time, 1830. がある。此の著は其の後、同講座を擔任せるソーロルド・ロジャース(James Edwin Thorold Rogers)の更らに浩瀚なる著作 A History of Agriculture and Prices in England 1259-1793, 7 vols, 1866-1902. を想起せしむるものがあると云はれてゐる。

ハーラッド(R. F. Harrod)氏曰く「ロイドはジェヴォンズ流の最終效用の概念を豫示した。ジェヴォンズが幾分喇叭を聲高に響かせ、コペルニカス的革命をほのめかして之れを公にしたに反し、ロイドは出版の言譯としてドラムォンド講座の規定が之れを要求する旨を辯疏するの必要を感じた。學問はロイドの謙遜に由つて損害を蒙つた」と。(An Early Exposition of "Final Utility."—Economic History, op. cit., p. 169.)。

七

更らに完全なる限界效用學說の豫示はロングフィルド(Mountifort Longfield)のLectures on Political Economy, delivered in Trinity and Michaelmas Terms, 1833, 1834. に於いて看出さる可きである。ロングフィルドは前述せるホウェートリが大監督職に任命せられて後、其の寄附によつて成立せるダブリン大學ツリニティ・カレッヂに於ける經濟學の講座を最初に擔任せる人である。

ロングフィルドに從へば、一物品の效用は其の有する人類の種々なる欲望又は願望の一又は其れ以上を滿足するの力を意味する。(ibid., p. 25.)。價値は他の物品と交換せらるゝ其の力である。一定の效用なくんば、一物件が何等の價値をも有すること能はざるは明瞭である。蓋し、何人と雖も、何等の欲望若しくは希望をも滿足せしむることなかる可きものに對して何等かの物件を與へ若しくは何等かの勞働を充當することなかる可きが故である。然しながら、一旦何等かの效用を有したならば、其の價値は、其の研究が經濟科學の頗る重要なる部門を構成する他の事情に比し這般の效用に依存することさまで大ならざる可きである。(ibid., p. 26.)。經濟學は理論的及び實際的の二部門に分たれる。前者は價値を取り扱ひ、後者は效用を取り扱ふ。價値と效用との間の對偶的對照は概して不條理である。恐らく總べての實際的目的に取つて、效用の最良の尺度は價値であらう、而して等しき效用を有する諸物が相異れる價値を有することある可く、又等しき價値を有する諸物が相異れる效用の程度を有することあるを證明するが爲めに用ひられた推理には詭辯が使はれてゐる。洵に、所有者に對するあらゆる特殊物品の效用は、彼れ等の事情及び境遇に從つて變化しなければならぬ。而して交換は各個人によつて所有せらるゝ財貨をして是れ等の

LECTURES

ON

POLITICAL ECONOMY,

DELIVERED IN

TRINITY AND MICHAELMAS TERMS, 1833.

BY

MOUNTIFORT LONGFIELD, LL.D.

Fellow of Trinity College, Dublin, and Professor of Political Economy.

DUBLIN:
WILLIAM CURRY, JUN. AND COMPANY.
LONGMAN AND COMPANY, LONDON.
1834.

一千八百三十四年版ロングフィルド著
『經濟學講義』表題頁

もの丶價値に比例して彼れに取つて最大なる效用を有するものたらしむ可く、換言すれば、是れ等のものをしてあらゆる他の等しき價値の所有よりも、彼れの幸福及び彼れの欲望の滿足と彼れの願望の滿悅により多く貢獻せしむるの目的に資する。斯くて交換の行はる丶際には、之れに對する各當事者は其の手放す物品に對して、彼れに關して、更らに大なる效用を有する或る物を收受するによつて或る物を利得せることを推定して大過なきものである。如何にして價値が測定せらる丶かは、初めは甚しく重要なるの觀なき事柄である。洵に、勞働は總べての貨物の價値の眞尺度であると稱せられる。然しながら、ロングフィルドを以つて觀れば、價値が惟り價値によつて測定せらる丶ものであり、其の量が全然割合に依存するものであり、而して一の尺度が他のものに比してより眞實の尺度とは呼ばれ得ないことは十分に明かである。(ibid., pp. 27-28.)。彼れは此の點に於いてベーリィと等しく相對主義を主張する。

ロングフィルド以爲らく、勞働は疑ひもなく價値の最良の尺度ではあるが、而もそは疑ひもなく之れが唯一の眞尺度ではないと。凡そ如何なる貨物と雖も、之れが價値にして其の價値の測定せらる可き物品の其れと直接に比較せらる丶を許すとしたならば、價値の尺度として役立つ可きである。而も、勞働が特に這般の目的に適するは、製造品の如き多數の物品に在つては、其の構成せらる丶原料品の價値以上に出でたる全體の價値が是れ等のものに就いて使用せらる丶勞働より取得せられ又是れに由つて測定せられ、而して原料品に關してすら、其の價値が之れを生産するに必要なる勞働量より取得せらる丶か若しくは是れに由つて測定せらる丶を得る同一貨物のあらゆる他の等一量と等しき價値のものたる一定部分が常に存するの事實から生ずる。(ibid., pp. 31-32.)。而してロングフィルドは勞働が財産の基礎たることを立證するが爲めにジョン・ロックによつて使用せられたる推理の誤謬を指摘し、而して勞働が或る一定貨物の價値の適當なる、即ち有用なる尺度たるが爲めには、該貨物の全供給が其の價値を全然、其の生産に費された勞働から取得す可きことを必要としないと說いてゐる。爾餘の部分と等しき價値の一定部分が、斯くして、云はゞ、之れを創造せる勞働に分解せられ得るとしたならば、十分である。實際上總べての貨物中には幾分斯くの如き部分が存在する。而して彼れは爰に限界生産費說を表明せるものと推想せらる丶章句を挿入する。曰く、其の價値が斯くの如くして測定せらる丶を許すあらゆる貨物の部分は、吾人が最も不利なる狀態と呼ぶ可きもの丶下に於いて、換言すれば、這般の貨物の或る一定量を生産するが爲めに勞働の最大なる投費を要する狀態の下に於いて生産せらる丶部分であると。(ibid., pp. 34-35.)。殆んどあらゆる貨物の生産價格若しくは自然價値は斯くの如き方法に於いて測定せらる丶ことが出來る。洵に例外は極めて少數であつて、經濟學に於いては殆んど全く重要性を有せざるものである。然しながら、彼れは其の全價値を其の稀少性より取得し、之れを其の生産に伴へる勞働から誘導することのない物品、若しくは、更らに正しく言へば、其の生産に勞働の一定量を投費するの必要以外の或る原因から其の供給の制限せらる丶物品の存在することを指示することを怠つてゐない。(ibid., pp. 33-35.)。

次いで、彼れは第三講に於いて、かのマカラックが、等しき勞働量の産物が常に精確に同一の眞實價値を有せざ

るを得ざることを立證するが爲めに使用せる證據を批評し、而して勞働が不變的であると云ふ意味に於いて眞實の價値尺度に非ざることを主張する。(ibid., pp. 42-44.)。或る一定の貨物が人間の生存に取つて如何に有用であり、若しくは必要であつてすら、或る一定の個人が消費することの出來る其の分量には制限が存し、而して多樣を愛するの念又は其の必要が彼れをして、若し之れを手放すによつて彼れが其の享樂により以上に貢獻し得る何等かの物件を取得し得るならば、彼れが一定の配分以上に領有する總べてのものを手放さしむ可きの事實からして交換は發生する。(ibid., p. 44.)。或る者が領有し而して消費せんと意圖することのない或る貨物の部分が供給と稱せられ、之れと交換して或る物を與へんとするの意向が需要と呼ばれる。(ibid., p. 45.)。あらゆる人は彼れが其の手放す財貨に對して能ふ限り多くを取得せんことを欲するものであり、斯くて又、あらゆる人は其の能ふ限り低廉に購ひ、高價に販がんことを切望する。(ibid., p. 46.)。ロングフィルドは進んで供給と需要との間の對等を確保する相互競爭の作用を詳細に叙述する。(ibid., pp. 46-47.)。這般の供給及び需要間の調整の外、或る一定貨物の生産費即ち自然價値は常に其の價格の上に頗る重要なる影響を及ぼす。生産費は供給を調整し、之れを交換價値と自然價値との間の一致を生ず可き需要に對する割合に可なりに近く保持する。(ibid., p. 47.)。

ロングフィルドは第六講に於いて、あらゆる物品の價値は需要及び供給に依存し、而して間接にはあらゆる貨物の效用並びに其の生産費は其の價格の上に影響を有する旨を再說する。價格は供給及び有效需要即ち實際に其の物品の購入若しくは消費に歸する需要間の對等を生ずるに十分なる高たる可きである。次いで、彼れは需要の本質並びに價格及び價値に及ぼす其の影響を檢討する。或る一定貨物に對する或る一定の人の需要の强度の尺度は彼れが依然として之れを有することのない狀態に殘存するよりも、寧ろ進んで之れに對して與へんことを欲し、且つ與ふるを得る高である。彼れは先づ第一に價格の上に何等の影響をも及ぼすに足るの强度を有することのない需要の存在し得ることを說くのであるが、而も猶ほ、縱令ひ實際的購入を來さしむるに足るの强度を有することがないにしろ、價格に影響する需要の存することを認める。其の一例たるものは、現在の價格に於いては購入せんとせざるも、而も、輕微なる低減が生じたならば、市場に來つて購入を爲す可き者の需要である。斯くの如き需要は常に存在し、而して、競賣に際して其の附値の高が實際購入者の其れに次げる人の其れと恰も等しく價格を下落せしめざるの影響を有する。(ibid., pp. 111-112.)。

彼れは更らに進んで、相異れる人々の間に於ける需要の强度は彼れ等が都合好く行ふの力ある他の物件の犧牲に從つて相違するも、總べての者は需要供給を均等ならしむる同一の相場即ち市場價格に於いて其の購入を遂行す可きことを指摘する。今若し價格が斯くの如き額以上に一度位引き上げられんとしたならば、此の變化によつて購入者たることなきに至る可き需要者等は、其の需要の强度が正確に曩きの價格によつて測定せらる可き者でなければならぬ。變化の行はるゝ以前に於いては、より强烈ならざる需要は購入を來さしむることがなかつた、而して變化の行はるゝ以後に於いては、より强烈なる需要は尙ほ購入を來さしむ可きであらう。斯くて市場價格は、最少の强度を有するものではあるが、而も猶ほ實際の購入を來さしむ可き需要によつて測定せらるゝ。(ibid., p. 113.)。

ロングフィルドは其の論歩を進めて、啻だに需要の强度が相異れる場合に於いて、又、相異れる個人間に於いて變化するのみならず、幾多の場合に於いて同一人は自己の内に相異れる强度を有する種々なる需要を有するものと稱せられ得ることを指示する。食料品の消費は稀少に基ける價格のあらゆる增加と共に減少す可きである。斯くて、或る一定の人が價格騰貴の結果消費することなきに至る部分、若しくは價格が下落す可しとしたならば、彼れが消費す可き附加的部分は、彼れの需要の强度が彼れを抑制して之れを購入することなからしむる高價格よりも少なく、又、彼れをして之れを消費せしむ可き低價格に正確に等しき所のものである。(ibid., p. 114.)。斯くの如き推理の連系を相次げる稀少の度位及び其の結果たる高價格を通じて續行し、ロングフィルドは、各個人は、言はゞ、自己の内に順次增加しつゝある强度の需要の系列を有すること、或る一定時に於いて購入を來さしむる這般の系列の最低度位は貧富兩者に對して正確に同一であり、而して市場の價格を調整する所のものなること、又、富者の場合には貧者の場合に於けるよりも其の消費の減少に準じて此の系列即ち其の需要の强度は一層急速に增加することを論結する。(ibid., p. 115.)。斯くてロングフィルドは啻だに需要供給間の方程式の供給側に於ける生產費の影響を明示せるのみならず、需要側にも亦、注意を拂ひ、限界需要の學說を表明したのである。

ロングフィルドは、利率を以つて、需要側に於いては、資本の限界的價値生產力に由り、又、供給側に於いては、節約者が進んで將來に對して現在を犧牲たらしめんとするの程度に由つて決定せらるゝものとして說明する。資本は、「生產物が消費者に賣却せらるゝに先き立つて、勞作者の勞働の價値を彼れに前拂し、又、器具、道具及び機械を勞働者に供給して勞働者を物質的に援助し、彼れをして更らに生產的ならしむるに資するに由つて有用なるものである。(ibid., p. 187.)。然しながら、勞働者に對して斯くの如き方法に於いて援助を與ふる機械の所有者は之れが價値、之れが使用より受くる損害、並びに之れが貸與せらるゝ期間に準じて其の使用に對して支拂はるゝものであつて、勞働の能率を增加する上に於ける其の效果に準ずるものでないことは明かである。斯くの如きは資本を使用する種々なる方法の總べての利益及び不利益の間に均等を生ぜしむる競爭原理の直接の結果である。或る機械の所有者が其の使用に對して同一價値及び持續性を有する他のものゝ所有者よりも多くを取得し得たとしたならば、人々は後者よりも寧ろ前者を購入し、斯くて又技工は之れを製造し、遂には各々の利潤は其の水準に歸せしめらる可きである。這般の水準は能率少なき機械によつて決定せられなければならぬ。蓋し、其の使用に對して支拂はるゝ高は斷じてそが勞働者に與ふる援助の價値を超過すること能はざるが故である。(ibid., pp. 187-188.)。資本に就いては、富を自己の直接滿足の爲めに消費することなく、之れを資本として使用する其の所有者によつて行はるゝ將來に對する現在の犧牲を除いては、本來何等の生產費も存せざるものである。(ibid., p. 196.)。

彼れは其の賃銀論に於いても亦、限界生產力說を豫示する。彼れは生存費賃銀說を拒否し、勞働者の賃銀は彼れの勞働の價値に依存するものであつて、先天的たると後天的たるとを問はず、彼れの欲望に依存するものに非ざることを論爭する。彼れの欲望及び必要が其の勞働の賃銀の上に或る影響を及ぼすとしたならば、そは人口の增加に及ぼす其の影響によつて生ぜしめらるゝ間接且つ第二次的のものである。ロングフィルドは茲に經濟學に在つては、

或る一定現象の第一若しくは直接の原因と其の影響が遙遠若しくは第二次的なるものとを周到に區別す可きことを主張する。(ibid., pp. 206-207.)。勞働の賃銀はあらゆる他物の交換價値と等しく供給と需要との間の關係に依存しなければならぬ。而して其の供給が現存勞働者の種屬から成ることも亦明かである。然も、其の需要は何に依存するか。疑ひもなく、勞働者の大多數の場合には、其の需要は彼れ等が行ひ得る仕事の效用若しくは價値によつて生ぜしめられる。婢僕及び通常不生產的と名附けらるゝ勞働者は他の泉源より生ずる基本によつて維持せられなければならぬが、勞働者の大集團は彼れ等の勞働の收益若しくは其の收益の價格から支拂はれなければならぬ。(ibid., pp. 209-210.)。各々の勞働者が收受す可き物品の配分は其の全價値の幾許が勞働より成り、又、幾許が利潤より成るかを計算し、而して後、各人の勞働の分量及び價値に準じて勞働者等の間に前の配分を分割するによつて看出される。(ibid., pp. 211-212.)。勞働者の眞賃銀、即ち生活の必要品及び便益品に對する彼れの支配は、全然、利潤率及び勞働の賃銀が費さるゝを常とする物品を生產する勞働の能率に依存す可きである。(ibid., p. 212.)。「勞働の賃銀率は利潤率と勞働の賃銀の支拂はるゝ諸貨物の製作に使傭せらるゝ勞働の生產性に依存する。斯くて又、勞働者の快樂は、利潤率、其の勞働の相對的價値及び彼れが其の賃銀を消費せんと欲する貨物の製作に使傭せらるゝ勞働の生產性に依存す可きである」。(ibid., pp. 215-216.)。

斯くて彼れは機械が賃銀を減少するの可能性を拒否する。吾人は更らに低廉に、即ち勞働賃銀若しくは利潤率に於ける何等かの減少とは關係なく更らに低廉に貨物を生產するの目的に對するの外は、斷じて機械に依賴することなかる可きである。斯くの如き減少は機械とは關係なく、之れに對應する價格の減少を生ず可きである。是に於いて乎、利潤が附加せられたよりも以上に、勞働が生產費から控除せられなければならぬ、而して各人の勞働はそが蓑きに購入したよりも多くの物品を購入す可きである。(ibid., pp. 219-220.)。農業勞働の生產力は減少するの傾向を有する。斯くの如きは重大なる禍害である。あらゆる人は大地の產物を使用するの必要を有する。而してより多くの勞働が穀物の同一量を生產するが爲めに必要と爲るが故に、同一勞働量の賃銀は以前に等しき穀物を購入することを得ない。隨つて又、勞働者は自己及び其の家族の生計に備ふるの困難が增加するを看出すのである。人口の增加も亦、利潤率を引き上げ、斯くて又、賃銀率を引き下ぐる傾向を有する。此の最後の傾向は資本蓄積の增加によつて中和せられる。然るに生活の資を得るが爲めに劣等なる土壤に依賴するの必要より生ずる禍害は恐らくは社會の進歩に連れて生ず可き他の事情によつて制壓せらるゝを得可きである。農業の改良、改良せられたる分勞の仕組及び製造業に於ける機械使用の擴張は勞働者をして以前よりも却つて幸福にすら生活するを得せしめる。彼れは食料及び總べての原料の高價によつて失ふ以上に、總べての他の物品の價格減少によつて利得す可きである。勞働者の狀態は、自己の勞働の相對的價値、利潤率、及び彼れが其の賃銀を投費せんと欲する貨物の生產に使用せらるゝ勞働の生產力に依賴す可きである。社會がよく支配せられ、而して人民が倫理的であり、從順であるならば、社會の進歩は是れ等三個の量を彼れの狀態に有利なる態樣に變ずるの傾向を有する。生命と財產とが保證せらるゝならば、利潤率は減少し、勞働は更らに生產的と爲り、而して各人の勞働の相對的價値は增加す可きである。(ibid.,

pp. 235-239.)。

八

リカードオを以つて「無情なる福神（マンモン）の禮拜者」「金錢に關する利害の外、何物に就いても考ふることのない希伯來・カレードニア學派の開祖」と稱する其の反對論者の所言は固より不當なる誇張の責を免れざるものである。彼れは勞働階級に同情し、彼れ等の途上に於ける障碍を除去せんとした。彼れは其の友人ジョーゼフ・ヒューム（Joseph Hume）を助けて、勞働者が其の傭主と等しく互助の爲めに結合するの權利を擁護せしめた。洵に彼れは一千八百二十四年に於ける結社法撤廢の有力なる後援者であつた。然しながら、彼れの勞作の成果たる經濟的進歩の理論は悲觀的なるものであつて、勞働階級の前途に濃厚なる暗影を投げる。利潤率は賃銀の下落と共に上騰し、賃銀の上騰と共に下落すると做す彼れの主張は社會主義者に假すに資本及び勞働の必然的對立の論證を以つてした。而して、勞働價値說は又、反資本主義者に對して絶好の武器を與ふるものと爲つた。リカードオは啻だに英國社會主義者のみならず、獨逸社會主義者に對しても最も多くの知識的武器を供給せるものであつた。殊に彼れの價値學說はカール・マルクスに對して多大なる影響を及ぼすに至つた。限界效用學派はマルクス主義者に對する應酬として其の理論を發展せしめた。此の學派の人々は彼れ等にして若し社會主義者等が其の過激なる思想を支持するが爲めに利用し得ざる價値理論を發見することが出來たならば、彼れ等は社會主義的論據を說破し、現存經濟制度を是認するが爲めに極めて有利なる立場に立つことを得可きものと思惟した。彼れ等は軈がて惟り社會主義者に對する十分なる回答のみならず、遍く一切の經濟問題に對する解決の鍵をあらゆる人が此の時に至る迄等閑視し、其の眞意義を捕捉することを得なかつた單純なる事實に於いて看出したと思惟したのである。ジェヴォンズの語を以つてすれば、經濟學は效用の條件に關する十分にして正確なる探究の上に基かしめられなければならず、又、這般の要素を理解するが爲めには、吾人は必然人間の欲望及び願望を檢討しなければならぬ」と云ふものが是れである。（Jevons, The Theory of Political Economy, 2nd ed., 1879, p. 42.)。而して、ウィックスチードは夙に一千八百八十四年の交に於いて、ジェヴォンズ流の分析を適用してマルクスの價値理論を批判した。（『三田學會雜誌』第三十一卷第四號所載拙稿『ヒリップ・エッチ・ウィックスチードの經濟學の常識』一二四―六頁參照）。然しながら、經濟學史は、是れよりして凡そ半世紀の以前に於ける社會不安の裡に發生を見たる英國社會主義者並びに反資本主義的經濟論者の言說に刺戟せられて早く價値に關する限界效用說並びに利潤及び賃銀に關する限界生產力說の先蹤を出したことを明記しなければならぬ。是れ等の學說を信ずる者は社會進歩に關して、必然、リカードオ學派の其れとは相異れる結論に到達しなければならぬ。セリグマン教授の語を借りて言へば、英國は啻だに費用學說のみならず、又、限界效用說の鄕土とも看做さる可きものであつた。（Seligman, op. cit., p. 363.)。第二十世紀の初めに於いて、是れ等閑却せられた經濟學者の名が再び世に出でたことは塡太利學派並びにジェヴォンズの光輝を薄からしむるものと言はなければならぬ。